

式の書き方

算術演算子

数値を計算するには、+や×などの算術演算子を使用します。
例で利用できる算術演算子はつぎのとおりです。

| 演算子 | 説明 | 例 |
|-----|------|---|
| + | 加算 | $6 + 2 \rightarrow 8$ |
| - | 減算 | $6 - 2 \rightarrow 4$ |
| * | 乗算 | $6 * 2 \rightarrow 12$ |
| × | " | $6 \times 2 \rightarrow 12$ |
| / | 除算 | $6 / 2 \rightarrow 3$ |
| ÷ | " | $6 \div 2 \rightarrow 3$ |
| ^ | べき乗 | $6 ^ 2 \rightarrow 36$ (6の2乗) |
| % | 整数除算 | $10 \% 3 \rightarrow 3$ (10 ÷ 3 の小数点以下を切り捨てた値) |

いくつかの演算子を使用した場合、つぎの順序で計算されます。

- (1) べき乗
- (2) 乗算、除算、整数除算 (×、*、÷、/、%)
- (3) 加算、減算 (+、-)

式の実行順位を変更するには、優先する部分を () でくくります。最大 30 重まで () でくくる
ことができます。

(例) $(10 + 3) * 5 = 65$... $10 + 3 (=13)$ に 5 を掛けた値



算術演算子は全角でも半角でもかまいません。

数値の計算

数値を計算するには、算術演算子を使用します。

(例) $10 * ((3 + 5) * 2 - 6) / 4$

文字列の計算

式の中で文字列（定数）を指定するには、文字列の前後を二重引用符（"）でくくります。

(例) "山田 一郎"
"C:\¥K3¥data¥Jusho.tbl"
"123.456" ... (文字列)

文字列の中に二重引用符を含めるには、二重引用符をふたつ続けて記述します。

(例) "データベースの""トランザクション処理""について"
→ データベースの"トランザクション処理"について

いくつかの文字列をつなげてひとつの文字列にまとめるには、+演算子を使用します。

(例) "東京都"+"港区"+"西麻布" → 東京都港区西麻布



二重引用符は全角でも半角でもかまいません。

日時の計算

日時値の書き方

式の中で日時（型の定数）を指定するには、日時の前に日時型を表わすdをつけ、日時の値を二重引用符（"）でくくります。

(例) d"2002年5月24日 1時23分45.678秒"

日時の区切り文字は、数字以外の文字であれば何でもかまいません。また、区切り文字は1文字でなくてもかまいません。

(例) d"2002/5/24 1:23:45.678"
d"2002年5月24日 1時23分45.678秒"
d"2002-5-24 1-23-45.678"
d"2002 5 24 1 23 45.678"
… 「2002年5月24日 1時23分45.678秒」になる

年、月、日、時、分、秒には、それぞれつぎの範囲内で数字を指定します。

| 数字 | 範囲 |
|----|--------------------------------|
| 年 | 1 ~ 65535 |
| 月 | 1 ~ 12 |
| 日 | 1 ~ 31 |
| | ただし、2月 は 28日 まで。閏年の年のみ 29日 まで。 |
| 時 | 0 ~ 23 |
| 分 | 0 ~ 59 |
| 秒 | 0 ~ 59.999 |



日時の前につける d は、全角、半角、大文字、小文字のどちらでもかまいません。

2桁年の扱いと西暦指定

年を 0 ~ 99 の範囲で指定した場合、環境設定の設定に応じて自動的に 1900 年または 2000 年が補われるか、そのままの西暦年として扱われるかのいずれかになります。

環境設定に左右されないように指定するには、年の前に 西暦、AD、A のいずれかの文字列をつけます。

| | | | |
|-----|---------------|---|--|
| (例) | d"99年1月28日" | → | 1999年1月28日 |
| | | → | 環境設定の [西暦 2 桁入力時の扱い] が「常に 1900 年を加算する」に設定されている場合 |
| | d"西暦99年1月28日" | → | 99年1月28日 |
| | d"AD99年1月28日" | → | 99年1月28日 |
| | d"A99年1月28日" | → | 99年1月28日 |
| | d"0099年1月28日" | → | 99年1月28日 |

和暦の書き方

年を和暦で指定するには、年の前につきのいずれかの文字列をつけます。

| 元号 | 和暦文字列 |
|----|------------|
| 明治 | 明治、明、M、m、x |
| 大正 | 大正、大、T、t、夕 |
| 昭和 | 昭和、昭、S、s、シ |
| 平成 | 平成、平、H、h、へ |

| | |
|-----|---------------------------|
| (例) | d"昭和45年5月24日1時23分45.678秒" |
| | d"昭45年5月24日1時23分45.678秒" |
| | d"S45/5/24 1:23:45.678" |
| | d"へ14/5/24 1:23:45.678" |



英字で元号を指定する場合、全角、半角、大文字、小文字のどちらでもかまいません。

日時の省略値

日時の値はうしろから順に省略できます。月または日を省略すると現在の月または日が補われ、時、分、秒を省略するとゼロが補われます（ただし、日時文字列では1月1日が補われます）。たとえば、今日の日付が2002年11月15日 のとき、「2002年11月15日 0時0分0秒」を指定するにはつぎのように指定します。

(例) d"2002/11/15 0:0:0" … すべてを指定した形式
 d"2002/11/15" … 日付だけを指定
 d"2002/11" … 年と月を指定
 d"2002" … 年だけを指定

日時値が1以上、12以下の数字からはじまる場合や、1以上、31以下の数字からはじまる場合に限り月からの指定、または日からの指定とみなされます。1以上、12以下の数字で指定した場合、現在の年が補われます。

(例) 現在の日時が、2002年11月15日のとき、
 d"12/1" → 2002年12月1日 0時0分0秒
 d"5" → 2002年11月5日 0時0分0秒
 d"30" → 2002年11月30日 0時0分0秒
 d"33" → 2033年11月15日 0時0分0秒
 … 環境設定の指定が「常に2000を加算する」の場合

日時を省略して時刻だけを指定する場合は、時の値の前に : をつけます。日時を省略すると現在の日付が補われます。

(例) d":0:0:0" … 時分秒を指定
 d":0:0" … 時と分を指定
 d":0" … 時だけを指定

日時値を使用した計算

日時値を別の日時値で減算して、経過時間を求めることができます。計算結果は時間型になります。たとえば、表の日時型の項目 [勤務開始日時] から [勤務終了日時] までの経過時間を求めるには、つぎの式を指定します。

(例) [勤務終了日時] - [勤務開始日時] … 計算結果は時間型

日時型の値に時間型の値を加減算して、n時間後やn日前などの日時を求めることができます。計算結果は日時型になります。

たとえば、表の日時型の項目 [勤務開始日時] に時間型の項目 [勤務予定時間] を加算して、終了予定時間を計算するには、つぎの式を指定します。

(例) [勤務開始日時] + [勤務予定時間] … 計算結果は日時型



時間型に日時型の値を加減算することはできません。

日時文字列

日時型の値を文字列型に変換すると、日時形式の文字列になります。日時値の表記規則に従って文字列型の日時を記述すると、日時型の項目に転記（または変換）できます。

たとえばつぎの文字列は、日時型の項目に転記（または変換）できます。

(例) "2002年5月24日1時23分45.678秒"
 "2002/5/24 1:23:45.678"
 "平成14年5月24日1時23分45.678秒"
 "2002/5/24" … 日時計算時は「2002/5/24 0:0:0」として扱われる

日時文字列は、うしろから順に省略できます。月または日を省略すると1が補われ、時分秒を省略するとゼロが補われます（ただし、日時値では現在の月と日が補われます）。たとえば、つぎの日時文字列は、いずれも「2002年1月1日0時0分0秒」になります。

(例) "2002/1/1 0:0:0" … すべてを指定した形式
 "2002/1/1" … 日付だけを指定
 "2002/1" … 年と月を指定
 "2002" … 年だけを指定

ほとんどの日時関数は、日時形式の文字列と日時値のどちらでも計算できます。たとえばつぎの式では、下線部分を文字列型で指定し、うしろの部分を日時型で指定しています。

(例) #年齢("1970/1/1", d"2002/5/5")



- 日時型と文字列型の型変換についての詳細は、「データ型の変換」(P.26)を参照してください。
- 日時形式の文字列は、文字列型のまま加減算することができません。
- 「mm/dd/yyyy」と「dd/mm/yyyy」の形式で、日時文字列を指定することはできません。
- 日時値を文字列型に変換した場合、または日時関数で日時文字列を求めた場合は、環境設定と同じ表示形式の文字列になります。環境設定で[mm/dd/yyyy]または[dd/mm/yyyy]の表示形式を選択すると、日時関数で計算できない日時文字列になりますので、注意してください。

時間の計算

時間値の書き方

式の中で時間（型の定数）を指定するには、時間の前に時間型を表わす `i` をつけ、時間の値を二重引用符でくくります。

(例) `i"49時間23分45.678秒"`

日数、時間、分数、秒数には、それぞれつぎの範囲内の数字を指定します。

| 数字 | 範囲 |
|----|--|
| 日数 | -65535 ~ 65535 |
| 時間 | -1572863 ~ 1572863 (ただし、指定した時間が「65536日」未満になる値) |
| 分 | 0 ~ 59 |
| 秒 | 0 ~ 59.999 |

時間の区切り文字は、数字以外の文字であれば何でもかまいません。また、区切り文字は1文字でなくてもかまいません。

(例) `i"49:23:45.678"`
`i"49時23分45.678秒"`
`i"49-23-45.678"`
`i"49 23 45.678"` ... 「49時間23分45.678秒」になる

時間を日数から指定するには、日数の前に `d` をつけ、時間と日数のあいだを空白などの文字で区切ります。`d` は全角、半角どちらでもかまいません。

(例) `i"d_1:23:45.678"`
`i"d 日 1時間23分45.678秒"`
`i"d987日654時間32分10.678秒"` ... 「1014日間6時間32分10.678秒」に変換される



時間の前につける `i` は、全角、半角、大文字、小文字のどちらでもかまいません。

時間の省略値

時間の値はうしろから順に省略できます。分、秒を省略するとゼロが補われます。

たとえば「0時間0分0秒」はつぎの指定ができます。

(例) `i"0:0:0"` ... すべてを指定した形式
`i"0:0"` ... 時間と分を指定
`i"0"` ... 時間だけを指定

日数だけを指定すると、時間、分、秒にゼロが補われます。

(例) `i"d987"` ... 「987日間0時間0分0秒」になる



日数と時間の両方を省略することはできません。

時間値を使用した計算

時間型の値同士を加減算して、経過時間を求めることができます。計算結果は時間型になります。たとえば、表の時間型の項目 [労働時間] から [残業時間] を減算して基本労働時間を求めるには、つぎの式を指定します。

(例) [労働時間] - [残業時間]

日時型の値に時間型の値を加減算して、n 時間後や n 日数前などの日時を求めることができます。計算結果は日時型になります。

たとえば、表の日時型の項目 [勤務開始日時] に時間型の項目 [勤務予定時間] を加算して、終了予定時間を求めるには、つぎの式を指定します。

(例) [勤務開始日時] + [勤務予定時間] … 計算結果は日時型

表の日時型の項目 [郵送日] から 20 日後の日付を求めるには、つぎの式を指定します。

(例) [郵送日] + i"d20"



時間値に日時値を加減算することはできません。

時間文字列（時刻文字列）

時間型の値を文字列型に変換すると、時間形式の文字列になります。時間値の表記規則に従って文字列型の時間を記述すると、時間型の項目に転記（または変換）できます。

たとえばつぎの文字列は、時間型の項目に転記（または変換）できます。

(例) "1 時 23 分 45.678 秒"

"1 時間 23 分 45.678 秒"

"1:23:45.678"

"1 時 23 分 45.678 秒"

ほとんどの日時関数は、時間形式の文字列と時間値のどちらでも計算できます。

たとえばつぎの式では、下線部分を文字列型で指定しています。

(例) #時間加算("21:15:30", 4, 1)



- 時間形式の文字列は、文字列型のまま加減算することはできません。
- 時間型と文字列型の型変換についての詳細は、「データ型の変換」(P.26) を参照してください。

表のデータを使用した計算

式の中で表の項目値を使用するには、使用する項目の名前を指定します。項目の名前の前後は [] でくくります。

● サンプル

- 表の通貨型の項目 [金額] に、[単価] と [数量] を掛けた値を代入するには、[金額] の項目計算式に、つぎの式を指定します (参照: P.40 「数値の計算」)。
[単価] * [数量]
- 表の文字列型の項目 [都道府県]、[市区町村]、[番地]、[ビル・マンション名] に分けて登録している住所をひとつの文字列に繋げます (参照: P.40 「文字列の計算」)。
[都道府県] + [市区町村] + [番地] + " " + [ビル・マンション]
- 表の日時型の項目 [勤務開始日時] から [勤務終了日時] までの経過時間を求めます。計算結果は時間型になります (参照: P.42 「日時値を使用した計算」)。
[勤務終了日時] - [勤務開始日時]
- 表の日時型の項目 [勤務開始日時] から時間型の項目 [勤務予定時間] を加算して、終了予定時間を求めます。計算結果は日時型になります (参照: P.42 「日時値を使用した計算」)。
[勤務開始日時] + [勤務予定時間]
- 表の時間型の項目 [労働時間] から [残業時間] を減算して基本労働時間を求めます。計算結果は時間型になります (参照: P.45 「時間値を使用した計算」)。
[労働時間] - [残業時間]



[] は全角でも半角でもかまいません。

未定義値を使用した計算

データが何も入っていない状態のことを未定義といい、その値のことを未定義値といいます。たとえば表の項目の値がなにもない状態のことを、項目の内容が未定義であるといい、そのような項目の値は未定義値であるといいます。

式の中で未定義値を指定するには、二重引用符 (") だけをふたつ続けて記述するか、関数の#未定義を記述します。

"" は未定義を表わす定数です。#未定義は未定義値を戻り値とする関数です。

(例) & i=""
if([数量]=#未定義)

未定義値を含む計算をすると、計算結果はかならず未定義値になります。表内の計算では[ファイル属性]の[未定義項目値処理]で、未定義値の扱いをゼロにするか、未定義のままにするかを指定できます。

たとえば、つぎのような式では、[出庫数]が未定義のとき[出庫数]を0とみなして、&在庫数には[入庫数]が代入される方が便利です。こういう場合は、未定義の扱いをゼロにしておきます。

(例) &在庫数=[入庫数]-[出庫数] … 未定義の扱いをゼロにする

また、つぎのような式では、[数量]が未定義のとき[数量]が0とみなされると0で除算することになり、エラーになってしまいます。こういう場合は、未定義の扱いを未定義のままにしておきます。[数量]が未定義のままの扱いであれば、計算結果は未定義値になります。

(例) &平均単価=[購入金額]/[数量] … 未定義の扱いを未定義にする

[未定義項目値処理]の設定は表全体に対するものです。個別の計算を行なう上で扱いを変更する必要がある場合には、#未定義値変換 または #条件選択 などを使用して処理します。



[未定義項目値処理]で設定した未定義の扱いにかかわらず、集計関数では未定義の値を除外して集計します。

変数を使用した計算

式の中で変数の値を参照するには、参照する変数の名前を指定します。変数の名前の前には、変数であることを示す & をつけます。

たとえば、項目集計コマンドを使用して列を集計すると、集計結果が組み込み変数に代入されます。項目集計コマンドで[金額]の合計を求めた後、置換コマンドで[売上比率]に[金額]の比率を代入するには、つぎの式を指定します。

(例) [金額] * 100 / &合計値

配列変数の値を使用する

配列変数の値を使用して計算するには、変数名のうしろに要素番号をつけます。要素番号は、[] でくります。

たとえば、表の数値項目[英語]の点数から &科目平均 の3番目の値で減算するには、つぎの式を指定します。要素番号は、変数や項目値、式であってもかまいません。

(例) [英語]-&科目平均[3]



- & と [] は全角でも半角でもかまいません。
- # 代入を使用すると、式の中で変数の値を変更できます。

関数を使用した計算

式の中で関数を使用するには、関数の名前を指定します。関数の名前の前には、# をつけます。

たとえば、現在の年月日を求めるには、式に #年月日 を指定します。

(例) #年月日

関数の中には、引数をいっしょに指定するものがあります。

たとえば #年齢を使用して年数を求めるには、ふたつの日付を引数に指定します。

(例) #年齢("1962年5月20日", "1997年10月31日")

引数を指定する関数のほとんどは、引数の中に表の項目名や変数、関数を含めた式を指定できます。

(例) #年齢([誕生日], &年月日)

… 表の項目[誕生日]から、組み込み変数 &年月日 までの年数を求める

#年齢([誕生日], #日時日付(#日時値) - "d7")

… 表の項目[誕生日]から、現在日時の7日前までの年数を求める



- # は全角でも半角でもかまいません。

ファイル名を使用した計算

式の中でファイル名を使用するには、ファイルが保存されている場所（パス名）とファイル名、ファイルの種類を表わす拡張子を文字列として指定します。

(例) "C:\K3\KIRIV9\System\Kiri9.exe"

ファイル関数を使用すると、ファイル名の一部を取り出したり、ファイル サイズを調べたりできます。

(例) #ファイル名("C:\K3\Data\Jusho.tbl", 6) → C:\K3\Data\
… ファイルの保存場所（パス）
#ファイルサイズ("C:\K3\Data\Jusho.tbl") → 393216（バイト）

Windows では、画面上に出ているファイル名と、実際のファイル名の大文字と小文字が異なることがあります。このことは、フォルダ名についても同様です。#ファイル検索では実際のファイル名を返しますが、フォームのコマンドボタンや一括処理のファイル名入力コマンドでは、画面上で見たままのファイル名が取得されます。

ふたつのファイル名を比較する場合は、#UC2 または #LC2 で両方のファイル名の太文字と小文字を揃えておく必要があります。

(例) #UC2(&File1) = #UC2(&File2)



- 式の中でファイルのパス名を指定しなかった場合、一番手前の表のパス名が自動的に付加されます。
表がひとつも開かれていない場合、環境設定の [データファイル] のパスが付加されます。
- フォームを使用して表を編集している場合は、表のパス名ではなく、フォームのパス名が付加されます。
- ファイルの種類が Windows ビットマップファイル (*.bmp) または JPEG (*.jpg) のどちらかであれば、環境設定の [画像ファイル] のパスが付加され、[画像ファイル] のパスが未定義なら、一番手前の表のパス名が付加されます。
フォーム属性の [フォーム] タブにある [画像パスを使用する] が OFF になっているフォームでは、つねにフォームのパス名が画像ファイルのパスになります。

条件式の書き方（制約／条件編集）

条件に応じた処理を行なう場面では、条件式を使用します。条件式を使用すると「AのときはBにして、CのときはDにする」などの処理ができます。

計算式は計算した値を返しますが、条件式を使用する場所では、演算結果が真か偽のどちらかで判断されます。

| 判定 | 値 |
|----|-------------------------|
| 真 | 計算結果または比較結果がゼロでも未定義でもない |
| 偽 | 計算結果または比較結果がゼロまたは未定義 |

条件式で使用できる演算子

条件式では、算術演算子以外に=や≥などの比較演算子、.and や .or などの論理演算子が使えます。条件式で使用できる演算子と、演算子の優先順序はつぎのとおりです。

| 種類 | 演算子 | 優先順位 |
|-------|---------|------|
| 算術演算子 | () | 1 |
| | ^ | 2 |
| | ×、* | 3 |
| | ÷、/ | 3 |
| | % | 3 |
| | +、- | 4 |
| 比較演算子 | > | 5 |
| | < | 5 |
| | ≤、<=、=< | 5 |
| | ≥、>=、=> | 5 |
| | ≠、<>、>< | 5 |
| 論理演算子 | .not | 6 |
| | .and | 7 |
| | .or | 8 |

● サンプル

条件式のサンプルを示します。式の中の△は、空白文字を表わします。

- [備考] で値があるものを真とします。
[備考]
- [備考] が未定義のものを真とします。
.not △[備考] または [備考]=""
- [備考] 内の文字を拡張辞書順で比較して、「デザイン」が含まれていれば真とします。
#部分一致([備考], "デザイン", 3)
- [年齢] が20歳以上であれば真とします。
[年齢]>=20

- [年齢]が20歳以上 かつ 30歳以下であれば真とします。
[年齢]>=20△.and△[年齢]<=30
- [年齢]が18歳以下 または 60歳以上であれば真とします。
[年齢]<=18△.or△[年齢]>=60
- [年齢]が18歳以下または60歳以上 かつ [職業]が「なし」であれば真とします。
([年齢]<=18△.or△[年齢]>=60)△.and△[職業]="なし"
- [年齢]が18歳以下または60歳以上 かつ [職業]が「なし」または「学生」であれば真とします。
([年齢]<=18△.or△[年齢]>=60)△.and△([職業]="なし"△.or△[職業]="学生")
- [年齢]が18歳以下または60歳以上 かつ [職業]が「なし」でも「学生」でもなければ真とします。
([年齢]<=18△.or△[年齢]>=60)△.and△.not△([職業]="なし"△.or△[職業]="学生")



- 括弧を30重まで入れ子にして、評価の優先順位を変更できます。
- 論理演算子の前後は、かならず1文字以上の空白を入れてください。
- つぎの式は比較式でのみ有効です。条件式では希望どおりの判定にはなりません。

(誤) 20<=[年齢]<=30

(正) 20<=[年齢].and[年齢]<=30

項目制約式

項目に入力できる値を制限するには、項目属性の[項目制約式]に条件式を指定します。式の中で他の項目値の参照はできません。つぎのような条件式が指定できます。

●サンプル

- この項目に入力できる値を1以上、12以下にします。
`[]>=1 .and []<=12`
- 時間型の項目に30分未満と8時間を超える値を入力できないようにします。
`[]>="0:30" .and []<="08"`
- この項目に入力できる文字数を20文字以下にします。
`#文字数([])<=20`
- 局番の区切りで長音を使用することを禁止します。
`.not #文字位置(#全角([]), "-")`



つぎの式は比較式でのみ有効です。条件式では希望どおりの判定にはなりません。

(誤) `20<=[]<=30`

(正) `[]>=20 .and []<=30`

行制約式

項目に入力できる値を、他の項目の値で制限するには、項目属性の行制約式に条件式を指定します。つぎのような条件式が指定できます。

●サンプル

- [職種]で「その他」を選択したときだけ、[職業]の値が入力できるようにします。
(`[職業].and [職種]="その他".or ([職業]="".and [職種]<>"その他"`)
- [組]には、[学年]が1のときはAからCまで、[学年]が2または3のときは、AからEまでの値だけを入力できるようにします ([学年]の値も1から3までの値しか入力できなくなります)。
(`[学年]=1.and #対応番号("A,B,C",[組])`)
.or
(`[学年]=2.OR [学年]=3.and #対応番号("A,B,C,D,E",[組])`)



つぎの式は比較式でのみ有効です。条件式では希望どおりの判定にはなりません。

- (誤) `20<=[年齢]<=30`
(正) `[年齢]>=20.and [年齢]<=30`

項目の表示条件－条件編集式

表編集画面のセルの表示条件を項目値に応じて変更するには、[属性]メニューの[項目の表示条件]をクリックし、[条件編集]タブをクリックします。

条件は、[新規行]ボタンをクリックして[条件編集の設定]画面を表示し、[条件式]ボックスの をクリックして選択します。

一覧にない条件を指定するには、[条件式]ボックスに条件式を入力します。ここで指定する条件式は、かならず括弧でくくってください。 をクリックすると、[式入力]エディタを使用して計算式を入力できます。

●サンプル

- 集計行のマイナスの値を表示するセルに対して、表示条件を指定します。
(`#集計行.and []<0`)
- 「計」という文字を含むセルに対して、表示条件を指定します。
(`#文字位置(,"計")`)

フォームのオブジェクト－編集属性式

オブジェクトに編集属性式を設定すると、フォームのオブジェクトの表示属性を、条件に応じて変更できます。

オブジェクトの編集属性式は、[オブジェクトの属性] 画面の [表示] タブにある [編集属性式] に入力します。

編集属性式は、つぎのオブジェクトに設定できます。

- テキスト オブジェクト
- ピクチャ オブジェクト
- バーコード オブジェクト
- 角丸め矩形 オブジェクト

オブジェクトに編集属性式を設定すると、オブジェクトの表示属性をデータに応じて変更できます。編集条件式には、変更する属性名と値を文字列式で指定します。属性に指定する値は、引用符 (') でくくります。複数の属性を変更する場合は、属性と属性のあいだをコンマ (,) で区切ります。つぎの例ではフォント名を「MS Pゴシック」に、フォントサイズを「16」ポイントに変更しています。

(例) "フォント名'MS Pゴシック',フォントサイズ'16'"

属性によっては、[英文フォントの使用] のように、ON か OFF かを指定するものがあります。チェックボックスで指定する属性は、ON にするなら 1、OFF にするなら 0 (ゼロ) を指定します。つぎの例では、[英文フォントの使用] を ON に変更し、英文フォント名を「Arial」に変更しています。

(例) "英文フォントの使用'1', 英文フォント名'Arial'"

オブジェクトの表示属性を条件に応じて変更するには、#条件選択を使用します。つぎの例では、[数量] の値がマイナスのときだけ、文字色を赤に変更します。

(例) #条件選択([数量]<0,"前景色'指定色', 前景色'赤'")



- 属性名と属性値の英数字とカタカナは、全角と半角、大文字と小文字まで、正しく記述します。
- [継承] を指定するには、単に「継承」とだけ記述します。前後の括弧は必要ありません。
- どの条件にも該当しない場合は、標準の属性（編集属性式を指定していないときの属性）で表示されます。
- レコードの値を評価する編集属性式は、終端行では評価されません。つねに標準の属性になります。

色の変更

編集条件式で、オブジェクトの色を変更する場合は、属性値を RGB 値、色名前、色番号のいずれかで指定します。どの形式で指定する場合も、属性値は文字列型でなければいけません。

● サンプル

- 背景色を RGB 値で青に指定します。
"背景モード'指定色', 背景色'RGB(0,0,255)'"
- 背景色を色名で青に指定します。
"背景モード'指定色', 背景色'青'"
- 背景色を色番号で青に指定します。
"背景モード'指定色', 背景色'2'"
- オブジェクトの背景色を透明にします。
"背景モード'透明'"
- 表の項目 [性別] の値が「男」なら文字色を青、「女」なら文字色を赤にします。
#条件選択([性別]="男", "前景モード'指定色', 前景色'青'", [性別]="女", "前景モード'指定色', 前景色'赤'")
- 表の項目 [職業] の値集合に定義していないデータが入力されている場合は、文字色を赤にします。
#条件選択(#集合番号([職業],[職業])<1, "前景モード'指定色', 前景色'赤'")



- 色の名前は、[式入力]エディタで選択できます。
- フォントや罫線、背景色にはモード属性があります。たとえば [背景色] を指定した色で表示するには、[背景色モード] を「指定値」にしておく必要があります。

罫線の変更

オブジェクトの罫線には境界線モードがあり、境界線モードが「囲み罫線」の場合のみ、任意の罫線を引くことができます。

囲み罫線を指定する場合は、上罫線、下罫線、左罫線、右罫線ごとに太さと種類、色を指定します。

● サンプル

- オブジェクトの囲み罫線を引かないようにします。
"境界線モード'囲み罫線', 上罫線の太さ'なし', 下罫線の太さ'なし', 左罫線の太さ'なし', 右罫線の太さ'なし'"
 - オブジェクトの下端と右端にだけ、罫線を引きます。
"境界線モード'囲み罫線', 上罫線の太さ'なし', 下罫線の太さ'細線', 左罫線の太さ'なし', 右罫線の太さ'細線'"
 - 4 point の囲み罫線を引きます。
"境界線モード'囲み罫線', 上罫線の太さ'4pt', 下罫線の太さ'4pt', 左罫線の太さ'4pt', 右罫線の太さ'4pt'"
 - 囲み罫線を「子持罫線 1」にし、罫線の太さを 3 point にします。
"境界線モード'囲み罫線', 上罫線の種類'子持罫線 1', 下罫線の種類'子持罫線 1', 左罫線の種類'子持罫線 1', 右罫線の種類'子持罫線 1', 上罫線の太さ'3pt', 下罫線の太さ'3pt', 左罫線の太さ'3pt', 右罫線の太さ'3pt'"
 - 上下左右の罫線の色を、青、赤、黄色、緑にします。
"境界線モード'囲み罫線', 上罫線の色'青', 下罫線の色'赤', 左罫線の色'黄色', 右罫線の色'緑'"
 - オブジェクトの境界線モードを「立体」にし、立体色モードを「背景色の立体色」にします。
"境界線モード'立体', 立体色モード'背景色の立体色'"
-

編集属性の変更

付加文字や日時型の表示形式などの編集属性を、条件に応じて変更できます。

● サンプル

- 表の項目 [単位] の文字列を、末尾に付加します。
"末尾付加文字列"+[単位]+" "
 - 表の項目 [ファイル名] のファイル名と拡張子だけをテキストボックスのソースにしているとき、先頭と末尾に「ファイル名：」と「保存場所：<パス名>」を付加し、末尾の付加文字列の前で改行させます。この例では、フォームの [非表示改行文字] が「`¶`」に設定されているものとします。
"表示編集モード'指定値', 先頭付加文字列'ファイル名:', 末尾付加文字列'¶ 保存場所: "+#ファイル名([ファイル名],5)+" "
 - 表の項目 [月] の値が1桁なら、全角文字で表示します。
#条件選択(#桁数(#文字列([月]))=1,"表示編集モード'指定値',全半角文字変換'全角文字に変換")
-

アイコンの変更

角丸め矩形オブジェクトには、アイコンを表示することができます。このオブジェクトの [アイコン] 属性と [アイコン番号] 属性には、計算式や変数を指定することができません。条件に応じてアイコンまたはアイコン番号を変更するには、[表示] タブの [編集属性式] で [アイコン] 属性と [アイコン番号] 属性の値を指定します。

● サンプル

- 表の項目 [性別] の値が「男性」なら Man.ico を、「女性」なら Woman.ico を表示します。
#条件選択([性別]="男性","アイコン/Man.ico", [性別]="女性","アイコン/Woman.ico")
 - 表に削除レコードがあればゴミが入っているゴミ箱アイコン、表に削除レコードがなければゴミ箱が空のアイコンを表示します。
"アイコン"+#GETENV("windir")+¥System¥Shell32.dll+"", "アイコン番号"+#条件選択(#削除件数,"32",1,"31")
-